教育科学研究会通信

京都(関西)教科研例会案内 352 号

6 月号

蹴上　ねじりまんぼう

日時　2022 年 6 月 18 日（土）pm１：３０～pm４：００
場所　奈良教育大学附属小学校
内容　関西教科研第 12 回大会（ 第 335 回 6 月京都教科研例会を兼ねる）

提起

教師のしごとの魅力とは

問題提起と対談・トーク
山﨑隆夫さん・平井美津子さん
進行　鈴木啓史さん

６月例会は関西教科研の集会に合流します。昨年の奈良大会で企画した幻の講座を再現します。教科研常任委員の元小学校教師の山﨑隆夫さんと全国委員の中学校教師の平井美津子さんの講演と対談です。対談の進行司会は全国委員で会場校の鈴木啓史さん。教師の仕事の魅力について縦横に語ってもらいます。みなさんの参加をお待ちしています。ZOOM とリアル両方で開催しています。ZOOM 参加希望の方は申し込みをお願いします。URL 送信します。

352 号目次

1　6 月例会案内		1
2　5 月例会の報告	大西真樹男	3
3、わたしの研究ノート(15)	佐藤年明	8
4、教科研、これまでこれから(14)	本庄眞	11
5　編集後記・ニュース		
第 12 回関西教科研案内　資料　山のたより　（本庄）		

京都教育科学研究会第 334 回５月例会の報告

はじめに

５月例会は特集を手がかりにしつつ、不登校について考えました。ZOOM 同時開催を試みました。色々、不具合があったと思いますが、前回より音の環境が前進したようです。まず最初に参加者の問題意識を語ってもらいました。

提起

不登校の現在

-第１特集　５月号を中心にして一

提起　　大西　真樹男(事務局)

討議　参加者の問題意識（要旨）

芦田　広木論文　対処療法で考えるのか、原因分析を考えるか考えさせられた。　こどもだけでなく教師も不登校に。　　学校教育なんなのか　公教育に関係する疑問をもった。　　過度に競争文科省の問題がある。　信頼関係をかちとることが急務では。

河内　広木論文を読んで、感情的に怒りがわいてきた。　教育とは何か　学校とは何か　スタンダードに頼る問題点がうきぼりに。　　わかるとは何か。　国民的課題ではないか。

石澤　１０数年ぶりに参加。楽しみです。

井上　管理と管理教育　教師の問題を考えさせられた。

葉狩　現場の中で学校に来れない子に遭遇した。　　女子の中のストレス　担任とのつながりから不登校から学校にいってみようかな　６月以降　不登校克服　次の学校でも同じ体験をした。変な？自信　そういう子どもたちと関わる事が多かった。全てが学校にくるということではない。保護者　の問題　一人一人違う、不登校克服は　単純にはいかないのでは

寺井　1982 年にかかわった　登校拒否ということば　今また言われる　これにも納得した

佐藤　特集１　広木論文インパクト　10ｐ教育虐待について　光文社新書で深めた　古市論文？　精神科医の発言が　　インパクトがあった。　佐々木論文　　当事者が書いたもの　わかりにくい

野中　プーチンをみて戦争体験と結びつく　何故　あのような人がでてくるのか
戦争が突然起こる　こういう日本をどう考えていくのか　　悪が存在している　それを見抜く力を、世界情勢を考える　日本の構造的問題の深めを　そこに不登校の問題の背景にあるのではないか。

太郎　寄宿舎にはいっているこども　　４時間目にくる　その背景を考える　家庭も含めて　複雑です。

※佐藤氏が本の紹介をされました。吉益の不正確な聞き取りで間違っているかもしれません。すいません。

連絡・交流・確認事項

◆６月関西教科研集会(別紙参照)　昨年　奈良大会講座の幻の企画の再現です。

6/18(土曜日)　午後１時 30 分～　　奈良教育大学附属小学校

山﨑隆夫・平井美津子：ミニ講演と対談

テーマ　　教師の魅力を語る

コーディネーター　　鈴木啓史（奈良）※申し込みを是非お願いします。

※６月例会を兼ねます。

最近『危機の時代と教師のしごと』を出版された山崎氏、「教育と愛国」の映画に出演された平井氏、今という困難な時代に教師として生きる喜びを小学校、中学校の現場を通して語っていただきます。コーディネーターは奈良の民間教育研究サークルの若きリーダー　鈴木さんです。山﨑さん、平井さんにそれぞれ問題提起をしてもらい（ミニ講演）鈴木さんが対談という形で進行されます。魅力的な内容です。是非　たくさんの参加をお待ちしています。

※お二人の最新の著作『危機の時代と教師のしごと』『生きづらさに向き合うこどもたち』のサインセールを計画しています。

※開会挨拶　吉益　進行　今滝・石垣　講師紹介　石本　閉会挨拶　久保　関西教科研で担当します。対面開催を基本としていますが是非　事前申し込み登録をお願いします。

◆７月例会　　7 月 16 日(土曜日) 6 時半～

地球時代の教養とは何か(仮題)　佐藤論文を中心にして

提起　井上

ハイブリット開催の予定です。連絡いただければＵＲＬ　送ります。

◆夏の大会

8月8.9.10日　オンライン・大東文科大学

大会プレ集会　6月11日　　大東文科大学・オンライン

◆８月例会

8月20日(土)　オンライン開催（ＺＯＯＭ）

大会に参加して　　交流

教科研例会　2022/5/21

「不登校から見える日本の教育」　広木克行

提起　　大西真樹男

不登校の背景にある学校の現在と子どもについて考えてみたい。
「教室で息が詰まる」・・・不登校の原因になっている
では，なぜ子ども達が教室で「息が詰まる」と感じるのか。

文科省「不登校の子どもの実態調査に関する会議」が実施（2020）した「子ども実態調査」から，子どもの回答（6年生）。
不登校のきっかけ　「先生のこと」「いじめや嫌がらせ」「勉強のこと」「わからない」それぞれ25%前後存在する。
同時期に文科省が教師を対象に行った「学校調査」から
不登校の要因　「教師との関係」1.9%,「いじめ」0.3%,
「学業の不振」3.2%,「わからない」4.9%,
＊子どものデータとの乖離
教師は指導や指示の言葉は発してはいても，子どもの話を聞く回路を閉ざしている。

「行きたくても学校に行けない」　要因は複数の要因が重なったとき。
沖縄の教師の話・・・p.7下段
学力テスト順位向上，それが教育スタンダード。
＊子どもが暴れたり学校に来なくなるのはその結果であり，子どもが暴れる前にすでに教育が半ば崩壊している。
福井県議会の意見書・・・・p.8上段から下段
＊県議会が真剣に検討し意見を表明していること，そして問題を教員資質や研修不足などに矮小化するのではなく，過度な競争による教育歪みという背景にまで視野を広げ，構造的な要因に迫りながら教育行の在り方を問うている。
＊「息が詰まる」「先生が怖い」と言って学校に来られなくなるのは，ゆとりと対話を奪われた教師の指導に対する反応の一つ。
学校と教育を告発している姿。

中高一貫校に入学した子ども達の不登校と小学校低学年の不登校が増加傾向
二極化が進む学校の中で上位の学校に所属しながら，最上位でなくなることへの恐怖が子どもを苦しめている。偏差値や序列至上の価値観が

主に「調査」のデータから議論を進めている。

「きっかけ」と「要因」
様々なことがきっかけになる。それによって不登校になるとすれば，背景に「様々な要因」があるはず。

教師というか現在の教育行政の下で進められている教育活動は要因の一つと言える。

だから教師も仕事がいやなる。不登校

教師はきっかけになりやすい。

の
の
政

将来への希望を打ち砕き，子どもを絶望に追い込んだ。
中高一貫校はその教育的優位性を強調して登場したが，一方では学力の自己責任論で子どもを追い込む指導が目立つとともに，他方ではその学校数を制限し，中学校受験競争を激化させたことで小学生にも学力競争の大波を波及させるなどその影響は「深刻な帰結」を生み出している。

学校の状況の深刻さはあると考えるが，受験競争に打ち勝つ力を求める保護者の存在。自己責任論は保護者の中にも多くある。

低学年の不登校とともに幼児の不登園が増えつつある背景・・・
小学校入学前から始まる競争的な学習への適応を我が子に求め励ますの増加。結果として「教育虐待」やストレスによる陰湿ないじめの発生
公正性と平等性を深くむしばむ義務教育段階からの学校の二極化が公育と家庭にもたらす影響の深刻さ
幼児期の子育てにまで選択と自己責任の風潮を持ち込み，幼少の我が子から「子ども時代」を奪うほどの圧力を親たちに及ぼしつつある。

親

教

「必要だった支援は何か」・・・「特になし」50%以上
マニュアルに基づく不登校支援（電話による状況把握，家庭訪問，ＳＣの活用）
子どもについて個性や発達特性を調べ，科学的なエビデンスに基づく個に応じた指導・支援を経て可能な限り適切な教育機会につなげ，学習機障を目指す。

特支的な支援で対応することはある。
発達特性が要因の一つにもなっていることもある。

会の保

子ども達が拒否しているのは当事者の意思を省みず，支援者の意思と善意だけで取り組まれる「支援」であり，マニュアル通りの形式的な支援である。
「当事者のサインを読み取る」というケアにおけるコミュニケーションの意味を学ぶ必要がある。コミュニケーション不在の「支援」によって苦しみが増す体験をしたからこそ，学校的「支援」は「特に必要なし」と答えたとも考えられる。

幼少期の子どもへの支援の難しさ
「低学年群」への注目を求めている。が，「再登校」「学習の遅れ」という学校的視点からの指摘にとどまっている点に大きな問題がある。

おとなの意識を変えるのは難しい。
おとなの仲間必要

う

「スクールソーシャルワーカーと不登校」山田恵子
様々な要因が述べられている。やはり，要因の背景を考えれば社会の諸反映として不登校はあると考えられる。ケースごとに，子どもの声に耳粘り強く対応する。専門家の力もかりて。

矛盾の
を傾け

討議　（正確な聴き取りではありませんので発言要旨としておよみください。）

Ａ：　根本問題とハウツーと分けて考える　年金者問題で想うことですが
分断がある。不登校は国民的課題　攻撃　新自由主義のあらわれと思う

Ｂ：　学校の不登校　大人のひきこもり　子どもだけではない
大人が社会で生き生きしているか　職場の雰囲気変わっている。
学校つくり　最近は一緒に作っている感触がなくなってきた。
教師が生き生きしてない。そういう枠組みに　子どもも影響をうけている
きっかけは小さなことでもひきずっていく。　学校とは何か　考えたい。

Ｃ：　民生委員　児童虐待　老人の問題も含め　引きこもりの研修がある。
きっかけ　　要因　おいといて　　行政の研修の実態。
テレビ　とにかく行かせよう　ひきこもりの相談会に　社会問題ぬけている
文科省は意図的にスポイルしているのではないか。

Ｄ：　管理主義の統制　しめつけ　子どもの声を聴く　教育学の原則と思う
子どもに学べ　具体的にどうすればよいのか　　有効な形は考えてみたい。

大西　学校で　　書く事　日記など　自由に書ける場を　　そこから個別の話
対応していく　カリキュラム以外で話す　　とんでもなく少ない
積み重ねていく意義が。　１回　２回と。　　今は家庭訪問できない　よしとしない、　　校長「かってに家庭訪問するな」というどう喝？ひとつの突破口として子どもに書かすことは意義がある。　　保護者と話しのきっかけができる。それすらしないと保護者と話できないのではないか。

Ｅ：　かってはそういう実践例があった　舞鶴など。　今の管理体制ではやりにくい。　　教育観として　提起が必要ではないだろうか。

Ｆ：　娘　２年やのに親は先生の顔しらない、　５時半以降　電話つながらない
家庭訪問ない　耳をかたむける　　むずかしいと思う。　　特別支援学校でも困難、　　教師の連携も難しい　、組合の大会　教師の中でのパワハラが多く　教師が休む、　　教師の不登校の増大　　管理職が学校にこない状況
困難を抱える子どもを任したら周りの目がきになる。組合の大切さ痛感する。

Ｇ：　書かせることを大事にしている教師がいる　学校にはいれない子どもがいる
６年の子で　３年で不登校　担任がきっかけで不登校　裁判になっている。
特別な手だてがされている　　特別体制が確立された　　他のこどもたちも増えている　先生不足の中で　　人材の確保　若い教師がおいつめられた結果と思う、単純に教師の問題とも言えないように思う。

Ｈ：　子どもの声に耳を傾ける　丁寧に地道に。みんなができるかというと？
コロナでより深刻に　　ある中学では朝から欠席の電話が鳴り響く　　教師まかせになっている　教職員の量と質がとわれている。その支援のスタンスが弱い　京都版　学力テストをまた増やしている。学習　発達を保障しているのか、　行政　教師にしわよせがきている。

Ｉ：　きっかけ　要因わかりやすい　教師がつぶれていく実態も　教職員集団全体で不登校に対処する　弱いように思う。　おそらく教職員集団としての意見交流がないのではないか。　担任を守る　そういう体制ができているか　誤った判断　大きな判断がいる。　全国委員会に参加したが　戦後教育学の成果が一般の市民にどれだけ広がっているのか疑問。　医学の場合はある　歴史学でも　しかし教育学は　広がっていない、戦後教育学の成果をどうひろげていくのか、共有するものがないのか　知見　戦後教育学の広がり　浸透が弱い。アカデミズムにとらわれているのではないかと思う。

Ｊ：　リセットしなければ　ミスマッチの原因　怒りを感じた　調査と実態があってない　支援される側のケアがない　教育行政の責任が多い　河内発言に触発され、５月号の提起　特集２につながるのでは　地域と住民とどんな手だてをとるのか　学校だけでは解決できない

Ｋ；　論文の紹介　虐待　ネグレストの定義　子どもがどう考えているのかが第１
精神科医師の判断見解　教師教育関係との違い、他分野との連携が必要。

大西：　出口がみえないが　子どもの声を聴く　大人もこどもも
うわべのはなししかしない　話はしないのに情報だけ受け取る　でも話をしない　教師と親　情報もらうことが分断　昼のテレビ　ワイドショーの影響
そのうちに北朝鮮の問題がはいりこむ　ちょっとまてよ　考える余裕がない
民主主義　弱いもの　失敗も起こす　そのために話をしないとと改めて思う。

※討議の内容はあくまで要旨としておよみください。不登校というテーマの関係で大西さん以外はすべてイニシャルにしました。それぞれ違った方が発言されたという意味です。子どもの声を聴く、このことが原点ではないか、という大西さんの提起から深まった意見交換ができたと思います。

連載・私の研究ノート（第 15 回）

神代健彦編『民主主義の育てかた　現代の理論としての戦後教育学』(2021)　（その５）第８章　民主教育論 ── 身に付けるべき学力として（中村(新井)清二）
【５回中の２回目】　　**佐藤　年明**

前回連載の最後の部分での城丸の引用(中村 P.222)に続いて、中村氏は引用中の「概括」は城丸独自の言葉遣いだとして、さらに城丸の次の文章を紹介します。

【思想は、考えたり研究したりする上での方法となるだけではなく、人間が生きていくための生きかた、すなわち、実践の方向性や指針を示すものとなり、また実践への用意ある態度となる。「お母さんは苦労をしている」といういう概括は、その背後に、「だから、わたしはお母さんに、こんな態度で接しよう」とか、「こうしてあげたい」という実践の方向性や態度を秘めている。思想は、このように、認識のたんなる概括ではなくて、人間主体を動かす概括である。】(P.222 原著 P.174)

この引用を受けて、中村氏は次のようにコメントします。

【概括とは、「さまざまな事物を共通した性質から概念としてまとめること」を意味する哲学用語ですが、城丸は、「概括」を、事物にたいする認識のたんなる一般化ではなく、同時に行動（「実践」）の方向性を示し、態度を含んで、人間を動かすものと考えています。つまり、思想は、認識を素材とし、それらをまとめ上げつつ実践の方向性を示す「概括」だと考えられているのです。（中略）無数の概括のあつまりが思想だという事になります。】(P.222-223)

⇒「概括」*の語から私が記憶を辿って思い出したのは、以下の文献の一節です。長すぎるので、水内が「概括」について述べている部分の冒頭だけを抜粋します（下線は佐藤）。*

〜〜〜

川合章・城丸章夫編『講座 日本の教育　５教育課程』（新日本出版社 1976）所収

水内宏　第一章　教育課程の基礎理論

二　教科の本質とその編成　３　教科における知的概括と指導の系統性　<1　教科における概括の重要性>

（前略）教科の系統性 ── 教科内容の系統的な編成と、内容の系統的な指導 ── の確立のための基本原則を明確にすることが、民主教育とその教育課程論にとって必須の課題となってくる。

教科の系統性の確立にとってカナメともいうべき重要な観点は、教科における<u>概括</u>を重視することである。<u>概括</u>が欠落すると、既習内容の必然的な発展としての新しい学習の成立という系統学習の要諦が危うくなる。学習指導要領や文部省編の各教科指導書には、この<u>概括</u>という観点が不十分である。教科は系統的でなければならないが、「系統的」とは本来、「すでに学んだことの必然的な発展として新しいことが学ばれる」（傍点は原文）ことをさす*。ということは、既習内容それ自体の内部に、次の学習の推進力が形成されていなければならない。そしてそのような推進力を形づくるのが、<u>概括</u>、あるいは整理や総合にほかならない。

*城丸章夫「低学年の教科と授業について」『教科経営の創造・１年』国土社、1969 年、9 ページ

（中略）

<u>概括</u>の重視は、認識の量から質への転化を促進する。すなわち教科においては、個別的な認識のつみあげをふまえ、認識全体の質的転換が見通されねばならないが、それは<u>概括</u>の遂行によって可能となる。量から質への発展は、認識の内実としてみれば、それは、子どもが事物を概念として把握し、一定の法則をつかんだことを意味する。そして獲得した概念・

法則の駆使による新たな認識の形成への意欲と展望がひらけてくる。ここにおいて、子どもの認識発達にとって一つのふし（節）が形成される。自然や社会をとらえる結節点＝ふしになるような基本的な概念や法則をあきらかにしていくことが、今後の教科論に課せられた課題である。

なお概括の重要性は、知的学習（科学的認識）の場合だけでなく、芸術的認識や技能の学習についても基本的にあてはまる。ただ科学的認識が、主体として言語を介しての法則的認識や概括を特質とするのに対し、芸術的認識の場合は、音・色・形など形象を通しての事物の認識という点で特徴的である。また認識主体の「感情についての概括」をふくんでいるという点でも、特徴的である。しかし、非本質的なもの、基本的でないものをふるいおとし、本質的・基本的なものを識別してとりだすという概括固有の特質は、芸術的認識、技能の学習、科学的認識の三者に共通している。(P. 52-55)

～～

上記引用の最初から２段落目では、 中村氏が引用したものとは別の城丸の論文が引用されていますが、水内の引用部分は「系統的」*とは何かについてであり、*「概括」*に関係する引用ではありません。水内宏論文の*「概括」*に関する説明を読むと、城丸の*「概括」*とは議論のステージが異なるように思われます。上記水内論文の引用の末尾部分には、*「非本質的なもの、基本的でないものをふるいおとし、本質的・基本的なものを識別してとりだすという概括固有の特質」*という総括的な*「概括」*の概念規定があります。しかし、先に紹介した中村氏のコメントを再度引用すると、***【概括とは、「さまざまな事物を共通した性質から概念としてまとめること」を意味する哲学用語ですが、城丸は、「概括」を、事物にたいする認識のたんなる一般化ではなく、同時に行動（「実践」）の方向性を示し、態度を含んで、人間を動かすものと考えています。つまり、思想は、認識を素材とし、それらをまとめ上げつつ実践の方向性を示す「概括」だと考えられているのです。（中略）無数の概括のあつまりが思想だという事になります。】**(P. 222-223) *とあり、*「概括」*とは*「事物にたいする認識のたんなる一般化ではなく、同時に行動（「実践」）の方向性を示し、態度を含んで、人間を動かすもの」*であるというのが城丸に基づく中村氏の説明です。*

もちろん、行論の文脈を無視して教育学におけるの「概括」*定義として城丸論と水内論のどちらが正しいかというような議論の仕方は意味がないと思います。水内は最初から教科学習について論じています。水内は城丸を援用しながら*「『系統的』とは本来、『すでに学んだことの必然的な発展として新しいことが学ばれる』ことをさす」*と指摘し、これまでに行なってきた学習活動がこれからの学習活動に必然的につながっていくんだと子どもたちが納得しながら学習過程を歩んでいくために、*「分化された諸要素の学習の各ステップは、それまでに学習した諸要素についての概括を同時的・並行的にともなうことなしには、学習者にマスターされない」*と述べています。私はこれはものすごく重要なことを言っていると思います。例えば教科の授業の中で、うまく具体例を挙げられませんが、「そうか！先生、これはこないだ習った〇〇と繋がってるんだね」と子どもが膝を打って納得するような、そういう学習体験。現実にはなかなかそういう興奮を伴う体験はひき起こせないかもしれませんが、水内はあることを学習するときに、以前の学習内容と結びつけたり以前の学習の意義を意味づけたりすることを意識的にやろう、それによって子どもはいま学んでいることの意義を意識し自覚できる、と言っているように思うのです。その意識的努力なしには、過去の学習は速やかに忘却のかなたに去っていってしまう、ということじゃないでしょうか。また逆に言うと、以前の学習経験と結びつけ・意味づけて子どもたちの学びの世界を豊かに広げていけるような学習内容でないと学ぶ意味がない。そういう視点からの学習内容の厳しい吟味を教師など教える側に求めているんじゃないでしょうか。水内はそうした*「概括」*作業を毎時間の授業の中で行なわなければならないとしています。単元の導入とか総括という節目だけではなくて、毎時間の学習活動に必然的に*「概括」*の活動が含まれていなければならないというのです。こういうことがきちんと行なわれて、子どもたちが*

毎時間うんうんと頷きながら学んでいくさまを想像すると、私はわくわくしてしまいます。

ところで、そのような「概括」*は、教科学習の中で具体的にどのようにして、どのような場面で成立するのでしょうか。水内は*「既習内容それ自体の内部に、次の学習の推進力が形成されていなければならない。そしてそのような推進力を形づくるのが、概括、あるいは整理や総合にほかならない。」*と書いています。とすると、教科内容を選択し編成する教師が学習活動における*「概括」*の機会を意識的に設定する必要があることは自明でしょう。しかし、具体的な学習場面における*「概括」*の展開としては、「みんながいま学んでいるＡというこの内容は、先日学習したＢという内容とこのように関係しているんだよ」と教師の口から説明するだけでは、やはり決定的に不十分でしょう。子どもたち自身が学習内容相互の結びつきや意味を発見するよう導くような学習過程は、教師からの一方的説明よりはましでしょうが、予め構想した「発見過程」を辿らせるというのでは、子どもたちは教師が期待するように興奮したり喜んだりしないかもしれません。大きな学習の流れを、子どもたちがその都度*「概括」*を行ないながら辿っていけるように設定するとしても、「学んだことの繋がり自分にとってのその意味を発見し納得し、次の学習の推進力にする過程」は一人ひとりの子どもにおいて個性的なものになるはずです。*

水内はそうした「概括」*という学習活動の一人ひとりの子どもにおける個性的な展開ということについては述べていません。それよりも*「概括」*を可能にする科学的な共通の学習過程をいかに構成するかに関心を集中しているように思われます。中村氏が紹介している城丸の*「概括」*論の方が 9 年早く発表されており、水内は*「概括」*を論じた上記論文の中で別の城丸論文（*「概括」*に関する論文の 2 年後に発表）を援用しているものの、城丸の*「概括」*論自体には言及していません。*

水内論文で子どもの側から見た学習活動としての「概括」*の具体的イメージが明確でないことを上で述べましたが、さらに言うと、水内論文では*「概括」*があくまでも学校における教科の学習活動の中でのことがらとして捉えられているのか、それとも*「概括」*は学校外を含む子どもたちの生活全般の中での試行錯誤や経験の蓄積とも積極的な関係をもちつつ意識的にすすめられるものと考えられているのかが明確ではありません。仮にそこまで意識的に視野を広げて論じられていたら、城丸の《子どもの思想を構成するものとしての概括》という発想ともっと接点ができたのではないかと、勝手に残念に思います。*

ここまでで一回分の連載として十分長い文章量になってしまいました。元の「教育学文献学習ノート(22)-1」の中で水内「概括」論について自分の意見を書いた部分をほとんどカットせずに全部載せたからです。中村論文からは脱線している部分で申しわけないのですが、この「私の研究ノート」連載で教育方法学・教育課程論研究者である私がぜひ論じたい点であるため、残しました。

佐藤さんの連載が始まり「『民主主義の育て方』を読み直している、」「難解だが斜線で分けて意見を書かれたりしてわかりやすい」などの声をいただいております。ありがとうございます。感想、質問など気軽に事務局までおよせください。佐藤さんや神代さんにお伝えします。

最近の活動を通した雑感　（本庄　眞）

吉益さんから、昨年、「本庄さんの自由な思いをＡ４で１枚ぐらいに可能な範囲で書いていただけないでしょうか」という御要望が届いていたが、延び延びになっていました。2022 年の正月、種々のお詫びとして、毎年整理している山のメモとしおりを吉益さんに送付したところ、それについても触れてほしいということになりました。そのため、2020 年と 2021 年の年末に感じた２つの「ふりかえり」を多少修正して、皆様への報告としたく思います。

１.「自分とのかかわりを作る教育」（本庄自家本）に書いた「増補版に寄せて」より

仕事の方は、2015 年 3 月に定年退職となり、36 年間の教職を終えた。そのとき、「やっと、教育の入り口に立てたかな」という感慨が湧いてきたことを思い出す。その後、再任用、橿原市昆虫館、奈良県や三重県の小学校の常勤講師として勤務。早いのもので、退職後 6 年半が経過した。学校以外の視点から見えてくるもの、県という教育行政を越えて初めて見えてくるもの、同じ職場に 20 年後に勤務することで見えてくるもの、特別支援の立場から見えてくるもの‥教育の道は、まだまだ、奥が広くて深い。定年の少し前に引き受けた日本環境教育学会関西支部長・関西環境教育学会長としての活動の推進（6 年半）と並行しながら、故 G 先生からの「死ぬまで勉強ですよ」の言葉に従い、某大学生命環境科学研究科（緑地環境科学専攻）博士課程に 5 年通い、様々な方との議論と自分自身の整理ができたのは有難いことでした。

私が 21 歳の頃から温めてきた「分かるとは何か」という問いは、「教育」の中心に関わるべき重要なテーマだったのではないかと感じるようになった。また、「自分との関わり」で考える力を育てることは、子どもにも教師にも必要であり、人間として生きるための「軸」を作る上で、欠かせない要諦ではないかと思うようにもなった。

いっぽう、仕事の傍らで進めてきた、35 年以上になる大和吉野川の水生生物や奥吉野のニホンカモシカのモニタリング調査（縦軸）、あるいは三角点踏査（横軸）などのフィールドワークは、私の教育実践を確かなものにするためには、欠かせない調査活動でもあったとも感じている。これらの調査結果の整理と分析も早目に進めておきたいと思っている。また、教育現場における子どもたちとの議論とともに、職場を離れ、「環境教育」や「子どもの生活と文化」に関わる様々な方との議論は、自分の「生き方」、あるいは自分の教育観を深化させる上で、欠くことのできないものであったと思う。今後も、御縁のあった若者、子どもたちと、「生き方を考える場」、あるいは一息つける「学びの場」をできる限り作っていくことも自分の役割とお世話になった方への恩返しの一つだとも思っている。(2020.12. 18)

２.「1663 山のしおり―全体自然を求めて―」に書いた「2021 年の山をふりかえる」より

どんな山と出会うかは、当然のことながら、己の人生の有り様や世情が大きな影響を与える。前年から始まったコロナ感染は、ウイルスの変異とともに、更に拡大。11 月頃、いったんおさまったかに見えたデルタ株だが、新たにオミクロン株の感染が、これから始まろうとしており、未だに、新型コロナ感染終息の目途は、たっていない。長年付き合ってきた紀伊半島のカモシカが、2000 年前後、ウイルス性

のパラポックス病との付き合いを10年近く強いられ、バタバタ死んでいったことを考えると、まだまだ、人類も気長に、ウイルスと付き合っていく必要があるのかも知れない。

昨年、常勤から非常勤に変え、週に1度の休みができたお陰で、山の回数が増えた。1536山からスタートした2020年の山だが、終わってみると、1663山（点）。1年を合計すると、127点。遠出が難しいため、昨年同様、紀伊半島の山の密度が増えた1年と総括できよう。

昨年、『三角点や歩いたコースの密度が増えてくると、「未知を既知に変える」ことがこの行為の本意とすれば、今後の山行は、地図上の「独標」を目指すべきということが、次第に明確になるのである。地図上における自分の位置が楽に分かるようになったことが、その動きに拍車をかけようとする。』と書いた。

今年はそれを実践し、踏査すべき三角点がなくなった地域では、「独標」を随分歩いた。それら「独標」の中には、当たり前だが、れっきとした名前があることに気づいた。これで、さらに、山は奥深く、きめが細かくなった。これで、死ぬ（歩けなくなる）まで、山歩きの目標を失うことは無くなりそうである。例年のごとく初夏の季節にはギンリョウソウの発見、10月にはツチアケビ、11月にはアサマリンドウなどの新たな生息地に気づくこともできた。

さて、今年は、随分活動が拡散した。「子どもの生活と文化」への探求として、地元の「森のようちえん」の活動、学童保育の職員‥等、67歳になって、いくつか、新たなことを始めた。大人が楽しむことを重視する、自由な「森のようちえん」活動は、ほんと楽しい。また、学童に通うことによって、学校とは違う視点で子どもが見えてくる。何より、子どもと遊びきる時間があるのはうれしい。「新たな教育の場」としての可能性を感じている。それらに加え、Aさんとの伊勢街道歩き、Uさんから誘われる「なら山の会」の民俗的視点からの学びも、「新たな歩き方」のチャレンジである。これらの行為は、いつも新たな山を目指す自分らしいやりかたに重なるのかもしらん。お陰で、長らく宿題となっている、カモシカや川の生物、猟（漁）の聞き取りの整理、などが、一向に進まないままでいるが、まあ、仕方なかろう。

人生の終末に向けて、どんな道を歩むのか、これまで通り、他人事のように楽しもうと思う。「誰にも会わない静かな山へ単独行」は、私には、最も安全なストレス解消法であり、大切な「自分との対話の時間」であることは確かである。(2021. 12.31)

※本庄さんからご自身が研究されている貴重な論稿を投稿していただきました。さらに　詳細な資料　ご希望の方は事務局まで。
いただいた一部、資料を写真で紹介します。本庄さん　ありがとうございました。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

①勇気ある義人　古在由重セレクション　　太田哲男編　同時代社

古在由重の代表的主張などを選んだ論文集。今でいう市民の共闘を 70 年代、身を呈して取り組んだ古在の足跡がわかる。社共統一という難しさに翻弄された哲学者の生き方、真摯さに心が震えるような思いがした。

②震災を語り伝える　若者たち　　瀬成田実　かもがわ出版

佐藤年明さんから教えてもらった実践記録。中学生が震災の事実を語り、語り部となって生きていく姿、それをさりげなく中学校教師として伴走する瀬成田さん。地域とともに未来を生きる姿から元気をもらう。

③何が記者を殺すのか　　斉加尚代　集英社新書

テレビジャーナリズムの可能性を諦めない。『教育と愛国』の映画監督、斉加さんのドキュメンタリー　の現場からの発信。立場の違う人たちに丁寧に取材し、事実をうきぼりにしていく姿に脱帽。ネットバッシングにひるまない記者魂に何度も共感した。

○教育と愛国　　2022　監督　斉加尚代　語り　井浦新

5 年前に MBS で深夜に放映され好評だったドキュメンタリー番組を映画化。さらに迫力をましました。平井美津子さんも出演され維新の議員の攻撃にひるまず、歴史の事実で子ども達と向き合われる姿が活写される。言葉を選んで取材を受けられる平井さんの姿をみて涙がでた。　ドキュメンタリー番組は道徳の授業で活用している。是非バージョンアップした映画を多くの人に見てもらいたいと思った。

編集後記・よもやま話

※ウクライナ問題から、日本の軍事力の強化、憲法改正など、憲法を守らない人たちが声高にさけびだしました。荒く言うと日本がプーチンのロシアのようになってもいい、殴られる前に殴りたおすというような暴論です。外交で平和的に解決する事が第１なのに危機に便乗してのこのような動きを世論の力で包囲しなければならない。参議院選挙の大きな争点だと思います。冷静に考えて投票したいです。

※例会　ＺＯＯＭ開催が定着してきました。新たな参加者の方が増えています。とりわけ音響効果の向上をはかっていきたいです。気軽に参加申し込みをしてください。

※関西教科研が近づいてきました。映画『教育と愛国』に出演されている平井さんと山﨑さんの対談、昨年の奈良大会で企画し、幻となった講座の再現です。快く企画に加わっていただいたお二人に感謝です。コロナ禍も心配ですがリアル開催とオンラインの同時開催です。仲間をさそってご参加ください。ＱＲコードから参加できます。６月関西教科研の申し込みをよろしくお願いします。

※大相撲、照の冨士の優勝。ゲスト解説の松重豊さんが「地獄をみた人は強い」と語っておられたが、まさにその通りの優勝だったと思う。